

図書館ホームページの魅力〈16〉

「失ったあとで気づくことのないように」



盛川 貴之

まず僕が伝えたいのは、矛盾するようだが、ホームページに魅力なんてものは存在しないということだ。誤解のないように補足すると、図書館だけがそうだ、と言っているのではない。ホームページと魅力についての僕の考えから言って、そんなものはないと言いたいのだ。

先日、映画『THIS IS IT』を見た。惜しくも実現しなかったマイケル・ジャクソンの同名コンサートを、記録として撮影されていたリハーサル映像を元に編集したものだ。僕は『ムーンウォーカー』とどちらを見るべきか迷ったけれど、話題性を考えて前者を選んだ。残念ながら、この話題性という言葉が表している通り、僕らはあまりMJに親しくない世代だ。彼の生み出す力強い音楽やダンス、その源泉にある高潔な精神に触れるよりも、むしろメディアが作り上げたスキャンダラスな人物像を受け入れて育ったのだ。しかしどうだ、映画の帰道、僕は自分が『スリラー』を、『デンジャラス』をレンタルしているのに気がついた！ はっきり言って、こんなことはそうそう頻繁に起こるものではないし、日常から大きくかけ離れている。魅力とはまさしくこういったことなのだ、僕は思っている。つまり、それは誰の目にも明らかな圧倒的な力なのだ。

ホームページにそれを求めることができるだろうか。というよりそんなものを感じ取る必要などあるだろうか。チャーミングな色使いや、意匠凝らしたレイアウト、それはそれ

で構わないし、実際かなり好ましいものだってあることと思う。しかしながら、そういった努力はどこか見当違いだという印象を受ける。なぜなら、ホームページは何よりもコンテンツが肝要だからだ。自分で作ったことがあればわかるかもしれない。タグを使いこなさなければ表面的に飾ったところで、中身がなければ意味がない。

図書館という空間は、魅力という言葉とは似ても似つかない、現実的で日常的な姿をした安ら^らか^かで確^たかな^なものであるはずだ。積み重なった六角形の閲覧室で、落ち着いて勉強などできるだろうか？ ぜひ一度、こういった観点から本学図書館のホームページを見てほしい。デザイン、全体の構成、一切が事務的で、決して予想を裏切ることのない作りになっている。

素晴らしい！

このホームページは図書館が備えるべき機能に忠実なのだ。本を探す、レポートを書く、自分が知らないことを、あるいは何を知らないのか知る。こうした知のロンボワンとして完璧に機能している。あなたの脳みそが不意にざわざわし始めた時、迷わずこのホームページを開こう。真新しい好奇心や戸惑いを、しかるべき場所に落ち着いて導いてくれることだろう。その瞬間に、あなたがまだ学生であることを僕は願いたい。

もりかわ たかゆき(フランス語学科4年次生)